

## 5.3 生物の調査

調査地区ごとに指標種となる生物が生息、生育しているかどうかを調査しました。記録された指標種をみると、明るい雑木林に生息、生育する種は、比較的広い範囲に分布して

### 【植物】

#### 【キンラングループ】

明るい雑木林を指標し、キンラン、ギンラン、ササバギンラン、エビネ、フデリンドウを含みます。西部丘陵地域に広く分布しており、特に座禅川上流域や、鷹取山山麓などの、まとまりのある樹林が広がる地域で確認されました。多くの地区で分布していますが、ササや低木が密生した林床や、スギ植林など、暗い場所では生育できません。近年雑木林の手入れが行われなかったこと、園芸用に乱獲されることなどが減少の理由のひとつとなっています。

#### 【キンラン】 ラン科

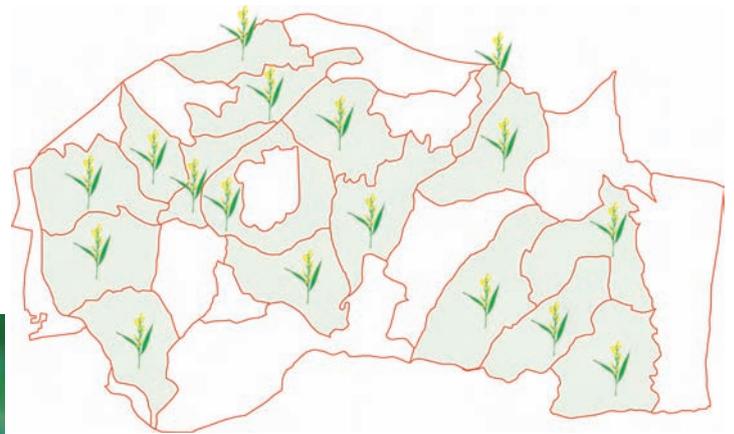
丘陵地の林床に生える、高さ40cm～70cmの多年草で、4月～5月に花をつけます。和名は金色の花をつけるランの意です。本州（秋田県以南）、四国、九州に広く分布しますが、園芸用の採取や、森林の伐採により減少しています。



キンラン

#### 【フデリンドウ】 リンドウ科

明るい林や草地に生える高さ6cm～10cmの越年草（2年草）です。4月～5月に青紫の花が茎の先に数個まとまって咲きます。北海道から九州までに分布し、



和名は、花の様子が筆の穂先に似ていることからつきました。



フデリンドウ

いましたが、うっそうとした樹林に生息する種や、自然度の高い草地、水辺を必要とする種の分布は、愛宕山周辺や鷹取山山麓に限られていることがわかります。



エビネ



ギンラン



ササバギンラン

#### 【エビネ】ラン科

丘陵地や山地の林床に生える高さ30cm～50cmの多年草で、4月～5月に花をつけます。和名は、横に連なって曲がる地下茎が、海老の尾に似ていることからつきました。九州以北から北海道西南部までに分布します。園芸用の乱獲や森林の伐採により減少しています。

#### 【ギンラン】ラン科

丘陵地の林床に生える高さ10cm～40cmの多年草で4月～5月に花をつけます。北海道から九州まで広く分布しますが、園芸用の採取や森林の伐採により減少しています。黄色い花のキンランに対し、白い花をつけることからギンランの和名がつけました。

#### 【ササバギンラン】ラン科

丘陵地から山地の明るい林に生える高さ

30cm～50cmの多年草で、5月～6月にギンラン同様に白い花をつけます。茎上部の葉が花序<sup>\*13</sup>より長いことで、ギンランと区別できます。本州から九州までに分布します。



#### 【生育環境】

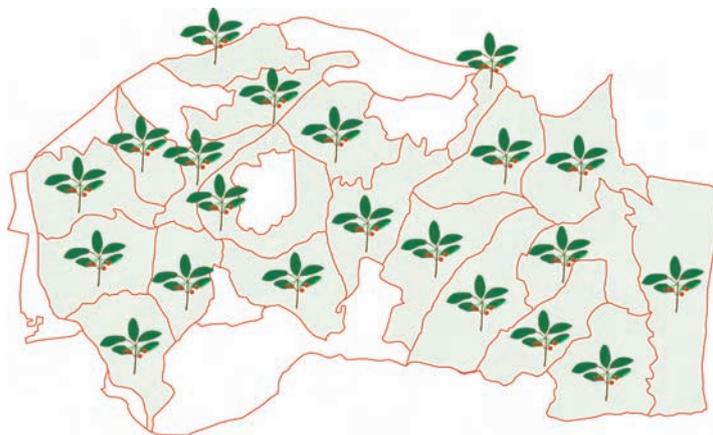
明るい雑木林。ササなどが密生していないため、林の中に広い空間があり、春には林床に日が差し込みます。

(吉沢 2004年4月7日)

\*13 花序：枝や茎上につく花の配列状態（花のつき方）のこと。軸の長さや、花柄の有無、比率などにより、いくつかの基本形態がある。

## 【ヤブコウジグループ】

常緑広葉樹や低木類が豊富な、うっそうとした樹林を指標し、マンリョウ、ヤブコウジ、ヤブツバキを含みます。樹林が存在する地区の多くで確認されました。どの種も市内でごく普通にみられますが、下草の手入れがされた開放的な雑木林には少なく、どちらかという、うっそうとした暗い林を好みます。



### 【マンリョウ】 ヤブコウジ科

高さ0.6m～1m程度になる常緑小低木で、7月～8月に白い花を咲かせ、秋から冬に赤い球形の果実を十数個つけます。和名は、同じく赤い実をつけるセンリョウ（千両）やヤブコウジ（十両）に対し、実の数が多いことからつけられました。古くから観賞用に用いられ、縁起物として正月飾りなどにも使われます。



マンリョウ

### 【ヤブツバキ】 ツバキ科

高さ5m～15mの常緑小高木で、本州から南西諸島までに分布します。海岸付近から丘陵地まで生育し、照葉樹林に多くみられます。日本の代表的な花木で、古くから観賞用に植えられてきました。



ヤブツバキ



### 【生育環境】

常緑広葉樹の多い林。林床には年間を通してあまり日が差し込みません。

(吉沢 2004年4月23日)

### 【ヤブコウジ】 ヤブコウジ科

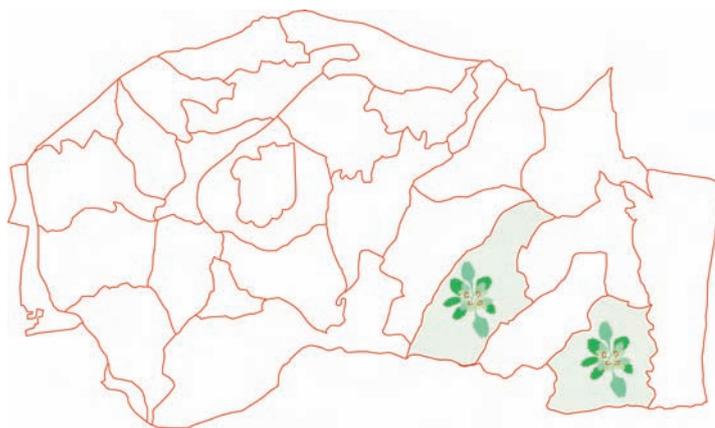
高さ約 10cm の常緑小低木で、北海道南部から九州までの低地や平地の林床で普通にみられます。7月頃に花をつけ、秋から冬に赤い実を数個つけます。マンリョウと同様、古くから観賞用として庭の樹下や鉢に植えられます。



ヤブコウジ

## 【イワボタングループ】

溪流環境を指標し、イワボタんと、ネコノメソウ属の一種を含みます。この種は、溪流沿いの湿った谷間という、限られた場所で生育します。西部丘陵地域においても、鷹取山山麓の不動川支流や、霧降りの滝上流部の沢沿いのみで確認されました。



### 【イワボタン】 ユキノシタ科

高さ5cm～15cmの多年草で、山地の湿った沢沿いに生え、3月～5月に小さな花をつけます。本州（関東以西の太平洋側）、四国、九州に分布します。



イワボタン



### 【生育環境】

溪流沿いや、谷間の湿った場所で、直射日光はあまり当たりません。

(吉沢 2004年4月8日)

## 【キツネノボタングループ】

水田や湿地などの水辺環境があることを指標し、キツネノボタン、ケキツネノボタン、タガラシを含みます。具体的には、小川や水田などの緩やかな流れ、湿地がある谷戸の低地、素掘りの水路のある場所で多く確認されました。同じ水田でも座禅川上流の谷戸には生育していますが、耕地整備された金目川沿いの水田地帯では確認されませんでした。



### 【生育環境】

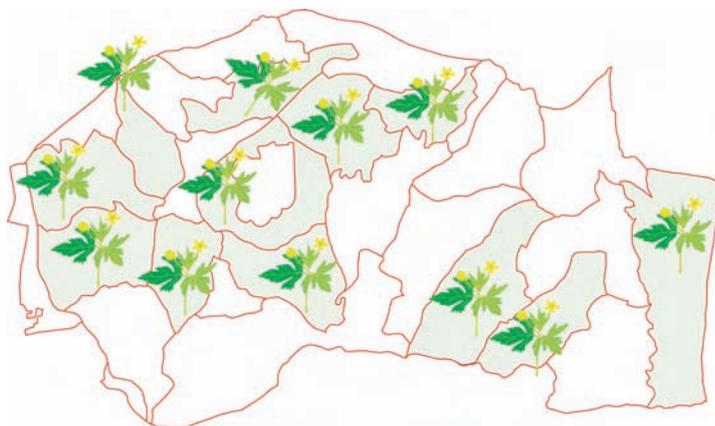
水田や湿地、湿った道端などに生育します。  
(土屋 2004年9月1日)

### 【キツネノボタン】 キンポウゲ科

高さ 30cm ~ 50cm の多年草で、日本全国に分布します。田のあぜや溝のほか、やや湿った道端や荒地にも生育します。4月~7月に黄色い花を咲かせ、後に、楕円形で、先端の曲がったとげを持つ果実をつけます。



キツネノボタン



### 【ケキツネノボタン】 キンポウゲ科

高さ 30cm ~ 50cm の多年草で、日本全国に分布します。形態と生育場所はキツネノボタンによく似ていますが、本種は茎や葉茎に開出毛<sup>\*14</sup>が多いこと、果実のとげの先端があまり曲がらないことなどで区別できます。

### 【タガラシ】 キンポウゲ科

高さ 30cm ~ 60cm の越年草。水田や溝など、1年を通して湿り気のある場所にみられます。北海道から九州までに分布し、4月~5月に黄色い1cmほどの花をつけます。



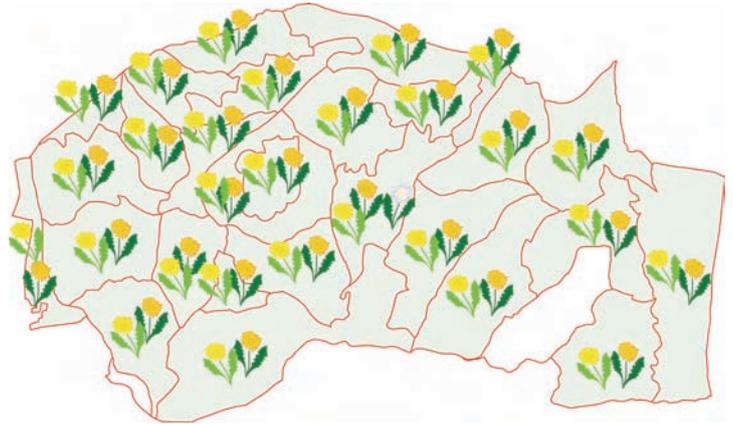
タガラシ

\*14 開出毛：茎や葉に生える毛の呼び名で、生えている場所に対して直角にまっすぐ伸びている毛のことを指す。

## 【優占するタンポポの種類】

日本に昔から生育する、カントウタンポポ（在来種）と、ヨーロッパ原産のセイヨウタンポポ（外来種）の分布の割合を調べることで、つまり、その場所を優占する種をみることで、草地在来の自然に近い状態に保たれているかどうかを知ることができます。

どちらのタンポポも西部丘陵地域のほぼ全域で確認されましたが、山林の多い鷹取山周辺ではあまりみられませんでした。駒ヶ滝周辺の谷戸や、鷹取山山麓ではカントウタンポポの割合が高く、昔ながらの環境が保たれているといえます。このほか、シロバナタンポポが1箇所でも確認されました。



### 【カントウタンポポ】 キク科

高さ約 30cm の多年草で、3月～5月に花をつけます。日本の固有種で、本州の関東地方から中部地方までに分布し、都市周辺から離れた野原、堤防、あぜなどに生育します。近年セイヨウタンポポの勢力が拡大し、減少傾向にあります。

### 【セイヨウタンポポ】 キク科

高さ 20cm～30cm の多年草で、通常は4月～10月に花をつけますが、真冬に咲くこともあります。ヨーロッパ原産の帰化植物で、明治初期に北海道に持ち込まれ、全国に広がりました。都市環境に強く、道端、空地、畑地などに多くみられます。

受粉しなくても結実する繁殖力の強い種です。



カントウタンポポ



### 【生育環境】

野原や道端など、開けて日当たりのよい場所を好みます。  
(土屋 2004年4月16日)



セイヨウタンポポ

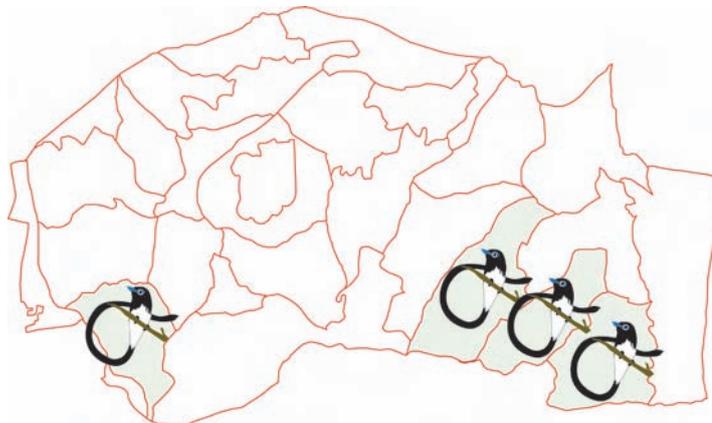
◇植物 指標植物の分布状況

*分類 指標種グループ 指標種	小地区番号																												
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29
<b>*植物</b>																													
<b>キンラングループ</b>																													
キンラン	●	●	●	●			●		●	●	●	●	●	●	●	●		●		●	●		●						
フデリンドウ	●											●		●															
エビネ			●						●	●	●														●				
ギンラン	●	●	●	●			●		●				●																
ササバギンラン	●	●	●				●		●			●	●			●													
<b>ヤブコウジグループ</b>																													
ヤブコウジ	●		●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●		●			●	●	●				
ヤブツバキ					●			●	●		●	●	●	●	●			●			●	●	●	●	●				
マンリョウ	●	●	●		●		●				●	●	●	●							●	●		●	●	●			
<b>キツネノボタングループ</b>																													
キツネノボタン	●	●		●	●		●		●	●			●		●		●										●		
ケキツネノボタン	●	●							●			●		●								●							
タガラシ							●															●				●			
<b>イワボタングループ</b>																													
イワボタン											●																		
ネコノメソウ属の1種									●																				
<b>*タンポポ</b>																													
カントウタンポポ	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
シロバナタンポポ																●													
セイウタンポポ	●	●	●	●	●	●	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

【動物】

【サンコウチョウグループ】

まとまりがあり、うっそうとした樹林の存在を指標し、サンコウチョウ、サンショウクイ、オオルリを含みます。サンコウチョウとサンショウクイは、鷹取山山麓でのみ確認され、オオルリは愛宕神社の近くなど数箇所を確認されました。これらの種は比較的標高の低い山林に渡来する夏鳥<sup>\*15</sup>です。調査地域内では確認数が少なく、生息できる環境が限られていることがうかがえます。



\*15 夏鳥：夏に日本に渡来し繁殖する鳥

### 【サンコウチョウ】 ヒタキ科

くちばしと目の周りがコバルト色のヒタキ類で、オスは特徴的な長い尾をもちます。夏鳥として渡来し、本州から屋久島までの各地で繁殖し、東南アジアで冬を過ごします。平地から標高 1000m 以下の山地の暗い林に生息します。

### 【サンショウクイ】 サンショウクイ科

日本には夏鳥として丘陵地や山地の雑木林などに渡来し、本州以南で繁殖しますが、県内では少数です。高い木のある樹林を好むことから、都市化の進行とともに平地から姿を消している鳥のひとつといえます。声がピリリと聞こえるので、「山椒は小粒でもぴりりと辛い」という諺から山椒喰いといつけられたといわれています。

### 【オオルリ】 ヒタキ科

夏鳥として渡来し、沢沿いの崖地などに営巣します。鮮やかな瑠璃色の背を持つ美しい鳥で、北海道から九州までに分布しますが、生息環境の減少とともに、生息数を減らしています。日本の三鳴鳥のひとつに数えられ、オスは目立つ高い木の梢に姿をあらわして、よくとおる大きな声でさえずります。姿が美しいことから、密猟の対象となることも減少要因のひとつと考えられます。



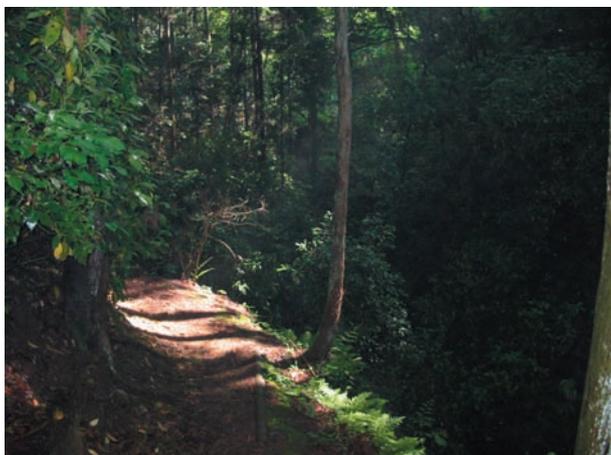
サンコウチョウ



サンショウクイ



オオルリ



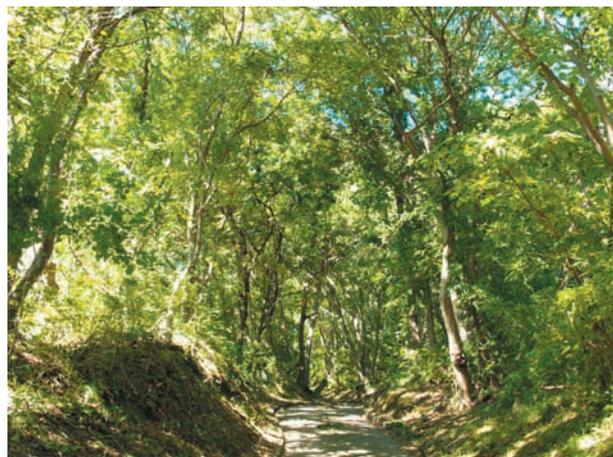
### 【生息環境】

比較的標高が低く、うっそうとした樹林が広がる環境。常緑樹が多く、日中でも林内にはあまり日が差し込みません。

(吉沢 2004年5月11日)

## 【キビタキグループ】

比較的うっそうとした雑木林の存在を指標し、キビタキ、センダイムシクイ、ホトトギス、ヤブサメ、イカル、アオゲラを含みます。このグループは、おもに愛宕山周辺や鷹取山山麓などのまとまりのある緑が残る地域で確認されたほか、金目川沿いの段丘崖でも確認されました。キビタキグループは、サンコウチョウグループより、人里に近い小規模な樹林にも生息できることを示しています。



### 【生息環境】

比較的うっそうとした雑木林で、林床にササなどは繁茂していません。  
(土屋 2004年10月15日)

### 【キビタキ】 ヒタキ科

夏鳥として渡来し、ほぼ全国の丘陵地や山地で繁殖します。オスは黄色い眉班、翼の白い紋、鮮やかな黄色の腹ですが、メスはオリーブ褐色で目立つ模様はありません。広葉樹林を好み、広葉樹林の中で飛びながらエサをとるので、樹冠<sup>\*16</sup>の下がある程度開けている環境が必要です。



キビタキ

□ \*16 樹冠：樹林を構成する樹木の梢や枝先のつらなり。

### 【ホトトギス】 ホトトギス科

夏鳥として北海道から九州までの丘陵地や山地に渡来します。ササ藪のある林に生息し、おもにウグイスの巣に托卵<sup>\*17</sup>します。

「特許許可局」や、「 Teppen Kake Taka」と聞こえる声で鳴きます。

### 【アオゲラ】 キツツキ科

体全体が緑色で腹側の横縞が目立つキツツキ類。日本の特産種で、本州から屋久島まで分布します。県内では、都市部以外の平地から山地までの林で繁殖し、あまり大きな移動はしません。キョッ、キョッやピョーピョーという澄んだ声で鳴きます。

### 【ヤブサメ】 ヒタキ科

ウグイスに似ていますが、小さくて尾羽が短いのが特徴の夏鳥です。県内では、相模川以西の地域に多く、下草のある暗い林に生息します。藪陰でシシシシシ…と尻上がりに、虫の鳴くような声で鳴きます。

### 【センダイムシクイ】 ヒタキ科

夏鳥として山地の落葉広葉樹林に渡来し、北海道から九州までの各地で繁殖します。県内では、箱根や丹沢などで記録があります。チヨチヨビーという鳴き声は「焼酎一杯グイー」と聞きなされます。



アオゲラ

### 【イカル】 アトリ科

スズメより大きく、黄色い大きなくちばしが目立つ灰色の鳥です。北海道から九州までの低地から山地までで繁殖し、北方のものは冬季に暖地へ移動します。県内ではおもに相模川以西で見られます。樹冠部で行動し、木の実、昆虫をエサとします。



イカル

\*17 托卵：卵の世話をほかの個体に託する動物の習性のこと。代わりの親は仮親と呼ばれる。

## 【ヤマガラグループ】

雑木林など樹林の存在を指標し、ヤマガラ、エナガ、メジロ、コゲラ、ウグイスを含みます。ヤマガラやエナガは、比較的まとまりのある樹林が広がる鷹取山山麓や、金目川沿いの段丘崖に残る樹林で確認されました。メジロ、コゲラ、ウグイスは、キビタキグループとくらべて小規模な林や藪にも生息できるため、さらに広い範囲で確認されました。



### 【ヤマガラ】 シジュウカラ科

背と腹が赤茶色をした小鳥で、全国に広く分布します。ツーツービーと、やや濁った声でさえずります。どんぐりなどの木の实を幹の割れ目や朽木に埋め込んで蓄える習性を持っています。



ヤマガラ



### 【生息環境】

雑木林を含む環境。樹林の規模は小さくてもよく、住宅街の小さな林なども生息場所として利用されています。

(吉沢 2004年4月8日)

\*18 アイリング：鳥類で、目の周りの羽毛が体色と異なる場合、その羽毛のこと。アイリングが目立つ種としてメジロがある。

【コゲラ】 キツツキ科

平地から山地までの林に生息する、背中に白黒の模様のあるスズメ大の小さなキツツキです。20年～30年前までは山地の鳥でしたが、近年は市街地の公園などにも生息するようになりました。枯れ枝などに自分で巣穴を掘ります。ギーや、キッキッキという声で鳴きます。



ウグイス

【ウグイス】 ヒタキ科

全国の低地から山地まで、広範囲に分布しています。2月～3月頃からホーホケキョとさえずりますが、藪から出てこないの、なかなか姿をみることはできません。林床に生育するササなどに巣をつくります。



メジロ

【メジロ】 メジロ科

全国の平地から低山の樹林までに生息する、緑色の背中と目の回りの白いアイリング\*<sup>18</sup>が特徴の小鳥です。住宅地にあらわれることもあります。おもに樹上でクモや木の実、果実をエサとします。チイチョチーなどと聞こえる声でさえずり、コケなどをクモの巣でからめてお椀状の小さな巣をつくります。

【エナガ】 エナガ科

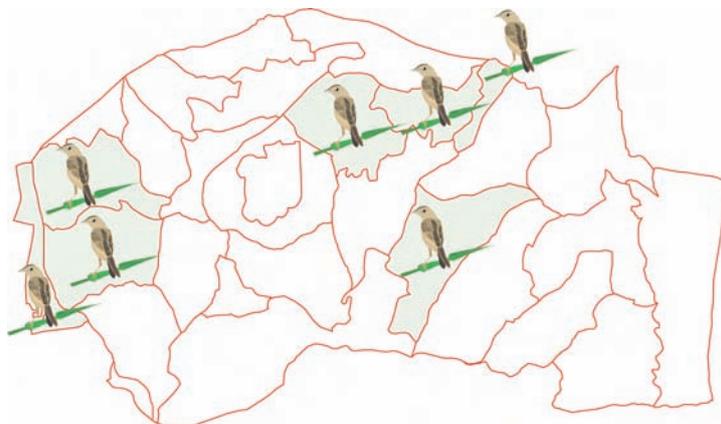
丘陵地から山地の森林までに生息し、県内では普通に繁殖しています。コケ類やクモの巣などを使った巣をつくります。樹林を好みますが、冬季は市街地でもみられます。ジュリッ、ジュリッと鳴きます。



エナガ

## 【セッカグループ】

自然性の高いヨシなどの草地の存在を指標し、セッカ、オオヨシキリを含みます。セッカは金目川沿いの斜面林脇にある草地1箇所を確認されたのみで、オオヨシキリは谷戸の草地や河川沿いの草地で少数が確認されました。



### 【セッカ】 ヒタキ科

日本では本州以南に分布し、各地で繁殖します。低地から山地までの草原に生息し、ヒッヒッヒッとさえずりながら飛翔します。チガヤのようにやや丈の短いイネ科植物の茂る草原を好みます。県内では留鳥<sup>\*19</sup>で、河川や水田で普通にみられます。



セッカ

### 【オオヨシキリ】 ヒタキ科

夏鳥として全国に渡来し、県内では、川や湖沼の岸などのヨシ原などで繁殖します。ヨシ原を好み、ギョギョシ、ギョギョシと少し濁った声で鳴きます。夜間も鳴くことがあります。



#### 【生息環境】

開けており、ヨシのような丈の長い草が生えています。  
(土屋 2004年10月8日)



オオヨシキリ

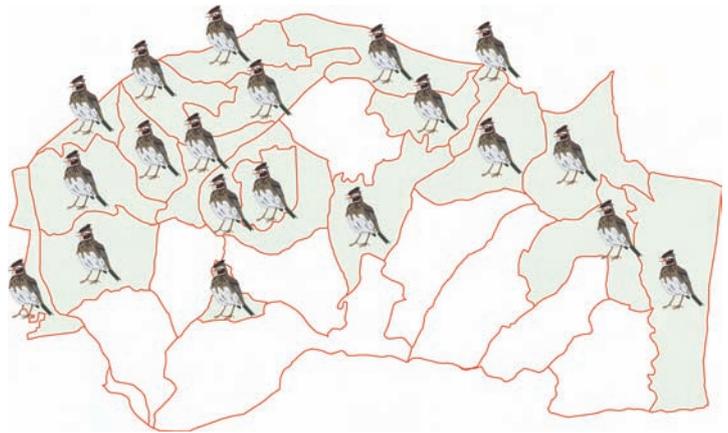
\*19 留鳥：その土地で一年中みられる鳥

## 【ヒバリグループ】

草地や畑地が広がっていることを指標し、ヒバリとキジを含みます。ヒバリは丈の短い草地を好み、キジは林縁の藪や畑地に多くみられます。キジはおもに遠藤原やその周辺の畑地の多い地域で、ヒバリは鷹取山山麓などの樹林地を除く平地や谷戸の草原で確認されました。なお、同じ丈の短い草地でも、ゴルフ場では確認されていません。

### 【ヒバリ】 ヒバリ科

広い草原に生息し、飛びながら朗らかな声でさえずる小鳥です。北海道から九州までの全国で繁殖しています。畑地、草原、河原などの丈の短い草がまばらに生えた草地を好みます。都市部では、草地の減少により、生息数を減らしています。



ヒバリ

### 【キジ】 キジ科

留鳥として山麓から丘陵地までの草原や林縁などの開けた場所に生息しています。一夫多妻で、オスは、赤い顔と緑の胸が目立つ美しい色彩をしています。ケーン、ケーンと聞こえる大きな声で鳴きます。日本の国鳥です。



キジ

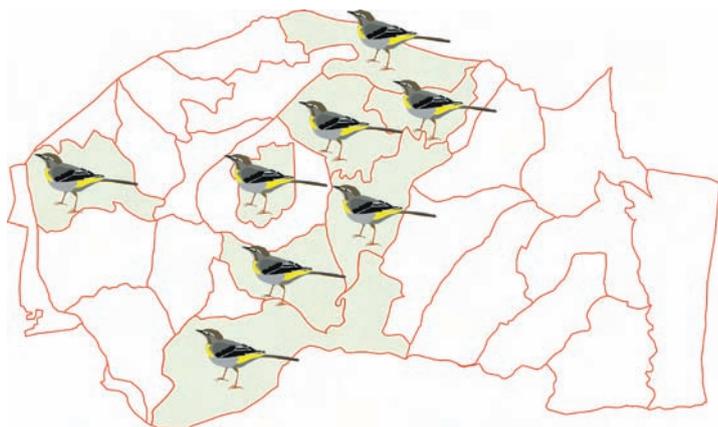


### 【生息環境】

丈の短い草地や畑地のような開けた緑地と、隣接する林の林縁部です。  
(土屋 2004年10月15日)

## 【キセキレイグループ】

河川などの水辺に依存する種で構成され、比較的良好な状態に保たれた水辺の存在を指標します。キセキレイ、セグロセキレイ、コチドリ、カワセミが含まれます。座禅川下流域や三笠川付近でカワセミが確認されており、エサとなる魚が生息すると推測されます。また、キセキレイやセグロセキレイの存在は、エサとなる昆虫の生息を示しています。



### 【生息環境】

エサとなる小魚や昆虫類の生息する河川や水辺です。

(土屋 2004年4月7日)



キセキレイ

### 【キセキレイ】 セキレイ科

留鳥として平地の河川や川岸、湖岸から山間部の溪流まで広く生息し、普通にみられます。セグロセキレイやハクセキレイにくらべて上流部に分布します。昆虫やクモ類をエサとし、チチン、チチンと鳴きます。

### 【コチドリ】 チドリ科

目の周りに金色の輪がある小型のチドリ類です。おもに夏鳥として渡来し、河原や砂浜で繁殖します。中流域から下流域までの砂礫の河原をおもな生息場所とします。よく似たイカルチドリよりは下流、シロチドリよりは上流にすみ分ける傾向があります。巣は、開けた砂地や砂礫地<sup>\*20</sup>に作られ、親鳥は、危険が迫ると敵の注意を引くために擬傷<sup>\*21</sup>を行います。



コチドリ

### 【カワセミ】 カワセミ科

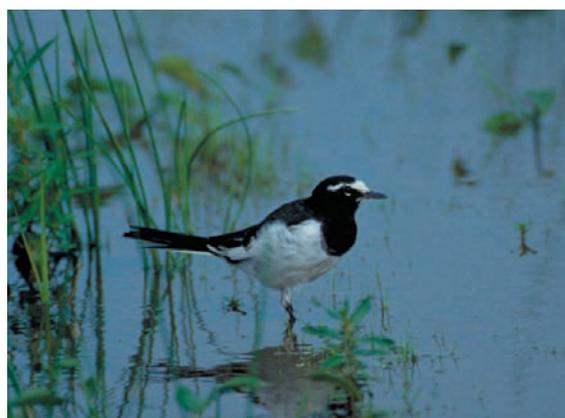
コバルト色の背と橙色の腹を持つ、くちばしの大きな美しい鳥です。全国に分布し、県内でもよくみられます。平地から山地までの様々な水辺に生息し、水中にダイビングして魚を捕らえます。土手に横穴を掘って巣穴とします。近年は、都市の公園でもみられるようになりました。



カワセミ

### 【セグロセキレイ】 セキレイ科

背の黒と腹の白がはっきりとした小鳥です。日本の特産種で、北海道から九州までに留鳥として分布します。水辺を好み、河川や湖の傍らに生息します。小川や溪流を好むキセキレイや、下流や海辺を好むハクセキレイと、不明瞭ながらもすみ分けをしています。ジジッと濁った声で鳴きます。



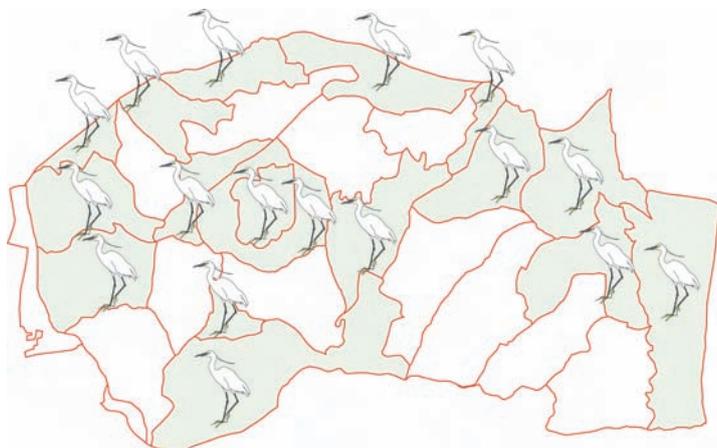
セグロセキレイ

\*20 砂礫地：砂や小石のある場所。おもに中流域の河原

\*21 擬傷：巣や雛から天敵を引き離すため、親鳥が怪我をしたかのように装い、敵を引きつける行動

## 【コサギグループ】

水田や湿地などの水辺があることを指標し、コサギ、ゴイサギ、ダイサギ、ハクセキレイを含みます。同じ水辺の鳥でも、キセキレイグループより水辺から離れた場所でもみかけることがあり、鷹取山山麓地域を除く平地や河川沿いで広く確認されました。



コサギ

### 【コサギ】 サギ科

全身が白で、くちばしは黒く、足指が黄色いシラサギの仲間です。本州から九州までの水辺で一年中みられます。県内でも河川や水田などに広く分布します。一般的に

### 【生息環境】

水田や湿地、河川などの水辺環境。サギの仲間はおもに水辺でエサをとりますが、水辺から離れた場所にも姿をあらわします。

(土屋 座禅川 2004年4月19日)

ほかのサギ類と集団でコロニー<sup>\*22</sup>をつくり、繁殖します。

### 【ゴイサギ】 サギ科

本州から九州までに分布します。黒色の背面と灰色の腹面が特徴的ですが、幼鳥は茶色に白い斑点の模様でホシゴイと呼ばれます。夜行性で、昼間はねぐらで休息し、夜間に池、沼などの水辺で魚やカエルを捕らえます。ほかのサギ類と集団でコロニーをつくり、繁殖します。

\*22 コロニー:集団繁殖地のこと。鳥では、サギやイワツバメなどが集まって巣をつくる場所を指す。



## 【猛禽類グループ】

生態系の頂点に位置する高次捕食者であるため、広い範囲にわたり自然環境が良好な状態に保たれていることを指標します。グループには、オオタカ、ノスリ、サシバが含まれます。繁殖期の2月～7月に飛翔がみられた地域をこのグループの分布として地図に示しました。3種とも土屋の愛宕山周辺や鷹取山山麓のほか、神奈川大学周辺など、まとまりのある緑がみられる地域と、その周辺で広く確認されています。



### 【オオタカ】 ワシタカ科

北海道から九州までの、平野部から亜高山帯までに生息します。狩りがうまく、古くから鷹狩りに使われてきました。おもにハトなどの中型の鳥類を捕らえて食べます。

生息には広い行動圏が必要なため、全国的に数が少ない種です。西部丘陵地域にも生息、繁殖していますが、安定して繁殖している場所はありません。警戒心が強く巣づくりや産卵時期に人が近づくと繁殖を放棄してしまうこともあります。



オオタカ

### 【サシバ】 ワシタカ科

春に沖縄や東南アジアから渡ってくる夏鳥です。本州から九州までの低山や丘陵地で繁殖します。水田などで、カエルやヘビ、昆虫類を捕えてエサとしますが、近年、丘陵地の開発や、水田が放棄されるなどにより、生息適地が減少するとともに、生息数も減っています。県内ではオオタカよりも少ないといわれています。

### 【ノスリ】 ワシタカ科

北海道から四国までの平地から亜高山帯までの林に生息します。河原や耕作地など開けた場所で、ネズミやカエルなどの小動物を捕らえてエサとします。空中の一点にとどまって飛翔する「ホバリング」を行います。県内では、かつて冬鳥でしたが、最近になって繁殖が確認されるようになりました。



### 【生息環境】

まとまりのある樹林と、開けた谷戸がセットになった環境です。繁殖には広い緑地を必要とします。  
(土屋愛宕山からの眺望 2004年5月11日)



サシバ



ノスリ

## 【ヤマセミグループ】

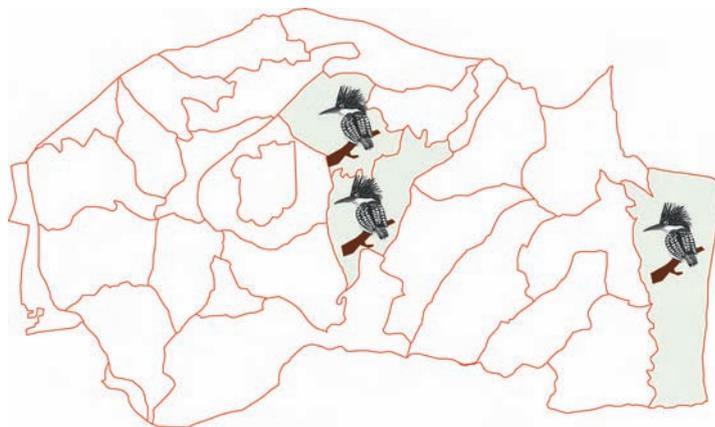
中流域以上の河川環境が良好な状態にあることを指標し、ヤマセミとイカルチドリを含みます。この2種は、中流域以上の河川に生息する種で、河川に依存して生活しています。ヤマセミは体が大きく、魚をエサとするため、広い行動圏が必要です。イカルチドリは生息地が少なくなり、県内ではあまりみかけなくなった種です。西部丘陵地域では、ヤマセミは金目川沿いで、イカルチドリは不動川沿いでのみ確認されました。



### 【生息環境】

河川の中流域以上で、ヤマセミではエサとなる小魚の生息が、イカルチドリでは小石の多い河原が必要です。

(金目川 2004年10月6日)



ヤマセミ

## 【ヤマセミ】 カワセミ科

黒白の鹿の子模様のカワセミの仲間です。ハトほどの大きさで、北海道から九州までに分布します。県内では留鳥として山地の溪流や湖、河川の中流に生息し、土手に穴を掘って繁殖します。行動範囲が広く、ひとつの沢に限られた数しか生息できません。ダイビングして魚を捕らえます。

## 【イカルチドリ】 チドリ科

コチドリより大きく、飛ぶと白っぽい淡色の翼帯<sup>\*23</sup>が出るチドリ類です。本州から九州までの河川中流の砂礫地や中州に生息します。繁殖期には、砂礫地上にくぼみをつけただけの巣に卵を産みます。コチドリと同様、親鳥は擬傷を行います。



イカルチドリ

□ \*23 翼帯：翼を広げた時に出る帯状の模様。多くは白色